

当クリニックの女性歯科技工士における 咬合治療患者への成育的アプローチ

○丸山美緒^{1,2)}, 石谷徳人^{1,2,3)}, 前野孝枝^{1,3)},
徳永まどか¹⁾, 倉谷華奈¹⁾, 山崎要一³⁾
(¹⁾ 医療法人 イシタニ小児・矯正歯科
クリニック,²⁾ デンタルキッズラボ,
³⁾ 鹿大・院医歯・小児歯)

【緒言】 当クリニックでは、2名の女性歯科技工士が、咬合治療装置の製作業務に留まらず、診療室に赴き、職能を生かした咬合治療患者とのコミュニケーション活動と、さらに日常生活における咬合治療に関する各種相談を専用電話によるサポートの中で担当している¹⁾。今回、歯科技工士らの成育的なアプローチについて、症例を通した具体的な事例、ならびに咬合治療に関する患者アンケートの調査結果について報告する。

【アンケートの対象と方法】 対象は、当クリニックに通院している咬合治療中の小児から成人までの患者で、平成25年3月の1か月間に当クリニックを受診した201名である。我々が作成したアンケート用紙に無記名で回答を依頼した。

【結果とまとめ】 患者が治療中に不便を感じることに、「歯磨き」の選択が152名(75.6%)で最も多かった。また、装置装着直後の違和感について、「数日程度」の選択が90名(44.8%)で最も多かった。専用電話によるサポート利用の有無について、「ある」の選択が42名(20.9%)であった。また、利用の感想として、「大変よい」の選択が32名(76.2%)と最も多かった。上記サポートを利用したことがない方のうち、90名(59.2%)が「必要があれば利用したい」を選択した。これらの結果も踏まえ、女性歯科技工士として、咬合治療患者への貢献を通じてさらに活躍の場が広げられるよう、各スタッフと連携を図りながら、引き続き研鑽を積んでいきたい。

【文献】 1) 窪山聖子, 石谷徳人: 成育歯科医療における歯科技工士の役割について, 小児歯誌, 50: 133, 2012(抄)。

永久歯先天欠如を有する小児患者の 口腔管理における歯科衛生士の役割

○前田愛里¹⁾, 石谷徳人^{1,2)}, 前野孝枝^{1,2)},
倉谷華奈¹⁾, 徳永まどか¹⁾, 山崎要一²⁾
(¹⁾ 医療法人 イシタニ小児・矯正歯科
クリニック, ²⁾ 鹿大・院医歯・小児歯)

【緒言】 当クリニックでは患者の継続的な管理の中で起こる様々な歯科的問題について、独自に考案した口腔管理の見取図(マイ・マネジメントマップ)を活用しており、その中心的役割を歯科衛生士が担っている。今回、永久歯先天欠如を有する小児患者の口腔管理において、クリティカルパスの提示を含めて、歯科衛生士が果たす役割について提示する。

【症例の概要】 (症例1: 保護者の不安低減の重要性を認識した1例) 初診時年齢7歳9か月の女児。上顎両側側切歯と下顎左側第二小臼歯の先天欠如有り。また母親も10本の永久歯先天欠如有り。現在、口腔衛生状態は良好で、第I期咬合治療を開始した。

(症例2: 早期からの口腔管理の重要性を痛感した1例) 初診時年齢11歳4か月の男児。下顎両側第一大臼歯の根尖性歯周炎。下顎右側第二小臼歯の先天欠如有り。口腔衛生状態は不良で、現在、上記第一大臼歯の歯内療法中である。

【まとめ】 小児患者の永久歯先天欠如においては、どのような治療法を選択したとしても、長期安定性の鍵は、歯科衛生士を中心とした齲蝕・歯周病予防と健康教育による口腔健康観の確立であると考えている。これらは、歯科医師による臨床対応と比べ、一見単調で地味に映ってしまいがちであるが、当クリニックにおけるすべての患者の口腔管理の基本と位置付けている¹⁾。小児期の永久歯先天欠如への臨床対応を適切な時期に適切な方法で行うためには、長期管理が前提であり、今後ますます歯科衛生士の役割が重要になってくるものと考えられる。

【文献】 1) 石谷徳人: 永久歯先天欠如を有する生活者への成育的アプローチ, 成育歯科医療研究会会誌, 12: 9-12, 2013。